とうきょう すくわくプログラム活動報告書

施設名	NICOLANDほいくえん
施設所在地	東京都青梅市新町４－１８－９
法人名	株式会社モアスマイルプロジェクト

１．活動のテーマ

＜テーマ＞

生き物

＜テーマの設定理由＞

（テーマに関する子どもの興味関心、園の特色など）

自園のこどもたちは自然の中でたくさん遊ぶという園の保育目標と園の周辺が自然に恵まれた地域であることから、普段から植物や昆虫、鳥などさまざまな生き物を身近に感じられる機会が多い。その経験から乳児期ではあるが生き物がこどもたちにとって当たり前にふれられる存在となっている。昨年度も‘生き物’をテーマとして設定したがこどもたちの生き物との関わり方、興味関心の視点に変化を感じることができた。今年度も引き続き‘生き物’をテーマとすることでさらに探究する生き物を増やしてみたり、探求の幅を広げることでこどもたちの興味関心を深めていくため。

２．活動スケジュール

令和７年４月～５月：春ならではの植物にふれる、その色を知る

令和７年６月～９月：夏ならではの生き物の観察・飼育

令和７年１０月～令和８年１月：秋から冬にかけての生き物の観察や採取、作品にする

令和８年２月～３月：移動動物園で実際の動物に触れる

３．活動のために準備した素材や道具、環境の設定

（活動のためにどのような環境を設定したか、準備した素材や道具）
透明カップ、コーヒーフィルター、霧吹き、ビニール袋、画用紙、クレヨン、定規、飼育ケース（餌、木、クッション等飼育に必要な物品）、木の実、フォトフレーム、
グルーガン、ボンド、紙皿、新聞紙、フライパン、竹、おとだま、ライトテーブル
絵本、図鑑、書画カメラ、ＰＣ、電子黒板
園内敷地内にて移動動物園の開催

４．探究活動の実践

＜活動の内容＞

・生き物の飼育と観察
・本や映像を通して生き物の生態を知る
・自然の中の探索
・植物を使って制作をする
・実際に生き物に触れる

＜活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり＞

春になり桜の花や小さな草花が多く咲く、誠明学園にお花見に行った。高いところにある桜よりも足元に咲く、タンポポは色的にも目につきやすいのか手にとる子が多かった。１歳児のまだ歩行がない男児の前にタンポポを持って行くと反応がなかったが隣に座っていた女児がそのタンポポを手にし、ふれていた。２歳児は広場の中を歩きながら見つけたタンポポを保育者に持ってくる子もおり、「ありがとう」と受け取ると嬉しそうにしていた。その経験から他児にも渡す子がいた。
夏になるとクワガタが園にやってきた。クワガタのフィギアを使って体の構造を説明しながらこどもたちの関心を深め実物のクワガタを観察した。子どもたちは身を乗り出して覗き込み興味深く見ていたので、クワガタをケースから出してみた。
「触ってみたい」という子どもたち。優しく触ることを約束として順番に手のひらに乗せてあげると「いや」と言って怖がる児もいれば喜ぶ児もいた。また、図鑑を持ってきて「これかな？」「これじゃない？」など照らし合わせながらカブトムシとの違いも発見していた。
０歳児は歩行ができない児が多いためロングライトバスに乗り公園へ探索活動に出かけた。季節が秋へと移り変わり、子ども達の視界に入る植物にも色の変化が見られた。保育者が「黄色い葉っぱだね」「赤いはっぱがあるよ」等、指をさしながら声をかけるとそちらの方を指さしたり、「あー」と反応を示しそちらの方に目を向ける子もいた。
子どもたちの身近にあるドングリやまつぼっくりを使い親子で制作を行った。子どもたちにとって身近にあるどんぐり、まつぼっくりを題材に書画カメラと電子黒板を使いみんなで見た目の違いを確認した。大きく映し出されたどんぐりやまつぼっくりを興味深く見ていたこどもたち。目隠し袋にまつぼっくりを入れ、感触だけで木の実を当てるゲームは思っていたよりむずかしかったようだ。またテーブルに色々な種類の木の実を用意し自由に好きな木の実を選べ制作ができるようにした。手に取りやすい小さい木の実を気に入る子が多かった。あそびのスペースに木の実を転がして音を楽しむコーナーを用意したところ、「カーン」と響く音を繰り返し楽しむ子もいた。ライトテーブルにラミネートした色とりどりの落ち葉を置くと光が当たりいつもとは違ったように見えるからかじっとその場から離れず見ている子もいた。
寒くなり、戸外で昆虫は見られなくなってきた。散歩をしている犬や猫を見かけることはあったので動物図鑑を作ってみることにした。いろいろな動物の写真と、画用紙、のりを用意した。各々が好きな動物を選び自由に貼り自分だけの動物図鑑を制作した。一人ひとりの興味・関心を持つ動物がそのまま自分だけの‘動物図鑑’になった。その後に開催された移動動物園では、事前にやって来る動物の名前や食べる物、関わり方などを伝えた。実際に動く動物を目の前にすると、口元に野菜を持って行くと食べてくれる動物を見て嬉しそうにする子どもたちだった。人参やキャベツを動物の口元へ持って行き、子ども同士で「たべたねぇ」と自分たちが差し出した物を動物が食べてくれた経験がとれも嬉しかったようである。関わり方については、自分でなでたり抱っこをしてみるというの動物の動きが速かったり、子ども自身に怖いと思う気持ちがありなかなかか難しかったようだった。保育者が抱っこをし膝の上に乗せ、「いいこいいこできるよ」と促すと保育者の膝の上にいる動物をなでる姿は見られた。

５．振り返り

＜振り返りによって得た先生の気づき＞

桜吹雪を見て、桜の花びらに興味を持ったようだった。花びらを拾ったり集めたりしていた。また、そこでタンポポを見つけ職員が、‘タンポポとけい’を作って見せたことでそれがとても気に入った子どもたち。その後もそれを作りたいと自分でタンポポを採取してきた。茎の長さが短いと作れないので長いものをと伝えたが、なかなか難しいようで
短い茎のタンポポを探してくる子が多かった。そういった長さの気付きもおもしろいと感じた。チューリップが咲き始めたことで、チューリップの歌を歌う子もいる。
昆虫の飼育ではクワガタのフィギアを使用したことでより興味関心が深まり、図鑑で実際に見てみようという意欲につながったように感じた。０歳児の探索活動はクラスの子どもたちが落ち着いた時期から戸外へ出るようにした。クラスの中で歩行ができる子がほとんどおらず、どのように戸外で活動をすすめて良いかと思っていたがロングライトバスを使用することで安全に無理なく活動をすすめることができ良かった。
秋に行った植物を使った親子行事では、特に男児の方は制作よりもあそびのコーナーの方で過ごしたい子が多かった。木の実によって転がり方や音、見え方を楽しむことができたのは良かったが、０歳児にとっては誤飲に気をつけなければいけない難しさを感じた。
自分だけのオリジナル動物図鑑は子どもたちにとってとても実りあるものになったと感じた。最後まで自分でで取り組み、自分が見て興味のあるものを集めるという体験はとても良かったと思う。移動動物園では、事前に図鑑や写真を見て動物の名前を伝えていたのでその点では身近に感じられていたように思う。だが、ふれあうということはなかなか難しかった。砂を投げてしまう子もいたり関わり方がわからなかったようだ。実際にふれて見ないと関わり方はわからないということもあるが事前に何か別のアプローチが必要だったように感じた。